

国立東京療養所にて

天国の労働人

——マタイ伝 20 章 1 ~ 16 節——

〔『愛泉』 誌第 32 号、1960 年 6 月 20 日発行より転載〕

1959 年 6 月 27 日

小池辰雄

この世の計算によらない 天国の法則 一デナリの約束 葡萄園は天国的な場所 神から来て
いる恩寵 天国人の心をもって働く 一デナリは芥子種一粒 0 || 100 || ∞ 福音の中に人を
導き入れる 存在そのものをもって証する 救われていない兄弟に対する悲願 私たちの魂が
神・キリストに直結する 無限の天文学的な展開をする人となる キリストという一デナリ

【マタイ 20】

1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。 2 一
日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。 3 また九時ごろ
出でて市場に空しく立つ者どもを見て、 4 「なんじらも葡萄園に往け、相当
のものを与えん」といえば、彼らも往く。 5 十二時頃と三時頃とに復いでて
前のごとくす。 6 五時頃また出でしに、なお立つ者等のあるを見ていう「何
ゆえ終日ここに空しく立つか」 7 かれら言う「たれも我らを雇わぬ故なり」
主人いう「なんじらも葡萄園に往け」 8 夕になりて葡萄園の主人その家司に
言う「労働人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」 9 斯て
五時ごろに雇われしもの来りて、おのおの一デナリを受く。 10 先の者きたりて、
多く受くるならんと思いに、之も亦おのおの一デナリを受く。 11 受けしとき、
家主にむかい呟きて言う、 12 「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、
汝は一日の労と暑さとを忍びたる我らと均しく、之を遇えり」 13 主人こたえ
て其の一人に言う「友よ、我なんじに不正をなさず、汝は我と一デナリの約
束をせしにあらざるや。 14 己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく与
うるは、我が意なり。 15 わが物を我が意のままに為るは可からざるや、我よき
が故に汝の目あしきか」 16 斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になる
べし』

●この世の計算によらない

1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。 2 一



日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。

こここのところはキリストの例え話の中でも、異色のものの一つです。実に読んで不思議に思うことは、一日働いた者も、12時から働いた者も、3時ごろ、5時ごろから働いた者も、働いた分量に差があるにもかかわらず、全部これ一デナリを受けている。しかも、一番あとの者から逆に受けているということなのです。

そして、それに対して主人は、自分のものを自分の意のままにするのどこが悪いのかと、実に我々が読んで何か道義心に逆らひを感じるような例え話です。そして、

「かくのごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし」

という。どう考えてもこの話は表向き感心できないように感ずる。この世の計算によれば、確かに時間に比例して、しかるべくなすのが当然です。私たちもこのようなときに、時間に比例して、また、その人の能力に応じて、また、勤勉差に応じてやるのが、理の当然であるわけで、これはある角度から見れば真理であると考えられる。

●天国の法則

ところが、キリストは「この世」でなく、

「天国は」

と言っておられる。私たちの現実はこの世に生きています。ですから、私たちがいろんなものを感じたり、判断したりするのに、この世的な法則が先に立つのも当然です。それがなければ、ある意味において生きていけない。しかし、私たちはこの世の人であると同時に、また、天国人です。そういった二重の国籍を現実には持っている。いくら私たちが信仰の人であるからといって、この相対的現実の中に生きていく限り、この世の法則、また、その考え方というものが当然あるわけです。それ事態決して間違いではない。相対的真理はそこにある。それを、あまりかけ離れて、天国一点張りといったような、足場が地に浮いたようなことをすると、また、かえって実存がおかしくなるといったこともある。正直、パウロも常識人であった。キリストも確かにそういった面がありました。

この二重的空間の中に生きている、我々の存在そのものが、霊肉という構造です。その霊が、「健全なる肉体に健全なる精神が宿る」

というのではなく、

「健全なる精神が健全なる肉体を支配していく」

という、天国の法則がこの世の法則を支配していく。

数学の世界でも、物理の世界でも、もうひとつ大きな公理法則が枝葉の法則を貫き支配するといったような具合で、霊法と言いたいのですが——絶対法則でも、霊法でも、天国法則でもいい——そのことをキリストは今ここで大胆に言われている。

キリストは天国法を語らんとしている。ところが、ここを読みながら、我々の普通の理性、



常識に訴えてみるものだから、あの当時の人たちが躓いたと同じように、我々も躓き、彼らが呟いたと同じように我々もつぶやく気持が心のどこかに残っている。それはこの世の法則である限り正しい。けれども、大事なことは、

「もうひとつ奥の法則でこれを担ってしまう、大きく包んでしまう、法則づけてしまおう」

ということをつかむかどうか、ということにある。

●一デナリの約束

この主人は約束しました。一デナリの約束をしました。

旧約聖書、新約聖書は共に、契約、約束の宗教です。私たちの最終の救いは未だ約束されている現実です。けれども、

「神さまが約束しているから、間違いない」

と、これを受けとるのが信仰なのです。

「二日一デナリにて約束をなし」

という、一日の労働で一日の生命の糧をいただく。労働者一日の生命の糧に当たるものが一デナリで買われるのだそうです。後に行つた者には、9時に行つたのも、12時に行つたのも、3時に、5時に行つた者にも、何も約束をしていない。

「みな相当のものを与える」

と言われた。みんな失業者でなんにもしないで手をこまねいていた。だれも雇つてくれなからです。

聖書では「葡萄園」というのは、しばしば非常に豊かな内容を意味する場合が多い。葡萄園は「神の国」、イスラエル、また、「天国」ということに使われている場合が多い。イザヤ書の5章あたりでもそうです。ところがせっかく、よい葡萄が実ると思つたのに、すっぱい葡萄ができてしまって、天国ができるはずだったのに、天国ができなかつたと、イスラエルの民の不信を預言者を通して神さまは責めておられる。

●葡萄園は天国的な場所

彼らが雇われるところ、葡萄園は即ち天国的な場所です。この世の在り方は、みな計算をする。自分の行為、働きに対してどれだけの報酬がくるかと、これは当然です。こういうことがなければ、この社会は成立しない。この話においても、その角度がある。報酬として考える。聖書は旧約から新約に至るまで、ある意味においては因果応報ということが厳然として働いていると言える。

「目には目を、歯には歯を」

ということが、罪に対しては罪の贖罪ということがなければ、ただ、大慈大悲に赦すとい



うわけにはいかない。これも因果応報です。罪の処分はなされなければならない。キリストの十字架の深刻な意味もここにある。マタイ伝の5章においても、

「汝ら喜びよるこべ、天にて汝らの報いは大いなり」

とある。これも報酬観念です。原因があれば必ず結果がある。決して無法則の世界ではない。道徳的世界秩序がある。また、物理的な宇宙秩序がある。風が吹けば木が揺れる、葉が落ちる。これは物理の法則です。また、地球が太陽の周囲を回る。これは天体の運行法則です。私たちが人間の世界においては、いかにも、ある意味において不公平で無法則であるかのごとくに見える。確かに混沌混乱の面もある。けれどもなお、とにかくこの世界が保っているのも、カントの言葉を待つまでもなく、道徳の法則がどんなに破られても、なおこれが動かしている。人間では非常にそれが破られている。破られてはいるが、しかし、破られたつきりにはなっていない。法則を破ったということに対しては、必ずもうひとつ別の動きがきていて、それがしかるべき悪は悪として、善は善としてその姿を現わす。その報いを受けるということは、神の支配している神の法則の中において、道徳法則がどんなに踏みじられていようと、サタンにあやつられていても、なお、そいつをひっくり返すところの正しい道というのが、法則というものが動いている。だから、

「世の中は不公平だ、どうして自分はこんな目にあうのか、どうして人生はそうなのか」

とか、いろんな不如意、不平、不可解というものが起きてても、もうひとつ奥の世界で必ず、それはそのままでは終わらない。そういうものであるということに対する深い洞察、確信というものがなければ、その人は魂の世界の本当の法則というものを知らない。

魂の世界は決してごまかしがきかない。必ず魂の世界では、神は大丈夫と言って、一切を引き受けてくださる。どんなに不幸にみえても、それだけで終るということはない。

● 神から来ている恩寵

ところで、主人が働き人になしたことは、この世の分量や何かの法則ではなくて、もうひとつ別の法則をその人たちに与えようとする。実に、高次な法則のことを語っている。その高次な法則とは何であるか。それは私たちが動いている、生きているということの根源的な意味にかかわってくる。私たちが生き、また働くということは、自分の力で、自分の知恵でしていると思っっているけれども、実は私たちは、

「これは本来、自分固有のものである」

というものは一つもない。この肉体そのものがそうです。親からいただいたものです。また、それに係わる一切の能力また然りです。地上で幾年か生きているうちに、我々が育てられてきたいわゆる、親の導き、学校における先生の導き、先輩の導き、いろんな社会環境において導かれて、恩をこうむっていることを思うならば、一つとして「これはわがもの」



と言うことはできない。

これを尋ねていくならば、みな我々の存在そのものが神において与えられているものであり、神のものでないものは一つもない。

「実にすべてのものは神のものである」

と、パウロの言った通りです。ですから、私たちが在るということは、神によって在らしめられている。私たちが働けるということも、また、何かできるということも、神に授けられた能力によつて、与えられた能力をもつて為している。だから、私たちが一日働こうが、二時間や一時間しか働かなかろうが、働かしめられたという、そこに招かれて働かされたということとは、それは直ちに神から来ている恩寵の事態です。

●天国人の心をもつて働く

「7 汝等のうち誰か或は耕し、或は牧する僕を有たんに、その僕畑より帰りたる時、これに対して「直ちに來り食に就け」と言う者あらんや。8 反つて「わが夕餐の備をなし、我が飲食するあいだ、帶して給仕せよ、然る後に、なんじ飲食すべし」と言うにあらずや。9 僕、命ぜられし事を為したればとて、主人これに謝すべきか。10 かくのごとく汝らも命ぜられし事をことごとく為したる時「われらは無益なる僕なり、為すべき事を為したるのみ」と言え」(ルカ17・7～10)

ルカ伝17章のこのような話を今の若い人たちが読めば、まことに封建的な気分が漂っているといつて憤慨するでしょう。ある意味においてはそうです。

「ばかに主人はいばつているな。そして、私たちは使われている奴隷みたいだ。人権蹂躪だ」
じゅうりんとん
じゅうりんとん

なんて。不当であるといつて大いに吠いたりするわけです。

現代の社会の雇用関係というものは、そういったような関係では成り立たない。キリストが言われたその当時の社会状態、社会環境というものは、ある意味においては、こういう事態を反映しているということは社会的には言えるでしょう。けれども、私たちはそういういった相対的な真理の奥をつかまねばならない。自分のしたことに対して、

「自分はこれだけのことをした。だから、それだけの報酬をしてくれ」

という、いわゆる労資関係の観念というものではなくて、自分という存在を、働きというもの、そういった主人と我という関係からもうひとつ突き抜けて、神さまに造られたものとして、

「自分がしたどんな素晴らしいことも神の力によつてなした。自分自身はどこまでも無益な者である」

という、砕けといいますが、無といいますが、その徹底的な気持を私たちがこの例え話の



奥から受けとるのでなかったら、キリストの言葉を本当に生かすことではない。

ですから、一日働こうが、どれだけ働こうが、一週間働こうが、働いているということそれ自身がすでに恩寵の事態であり、喜びの事態であり、恵みであるということに來なければ、一デナリ、三分の一デナリ、また五分の一デナリという計算が出てくる。一デナリは既に——神さまが約束した恩寵であるという——「一デナリ」ではなくなってくる。

「ただ自分は命ぜられたことを喜んでいただけだ」

と言って、もはや計算の世界を絶する在り方にならなければ、この一デナリが平等に与えられて、

「ああ、けつこう（なものをいただいて有難い）です」

という気持にはならない。これは普通の常識の人間にはできない。そこで私たちが天国人としてこの地上において、根本的にその本質において天国人たるの在り方をして実は、

「天国人の心をもって働いている。ここに天国を建設するのだ」

といって、生きているのだということ徹底的に自覚することが、この話における一番大事なことであろうと思う。

●一デナリは芥子種一粒

生命の糧、「一デナリ」は私たちにとっては実に「芥子種一粒」と同じです。

「⁵使徒たち主に言う『われらの信仰を増したまえ』⁶主いい給う『もし芥種^{からだね}

一粒ほどの信仰あらば、此の桑の樹に「抜けて海に植われ」と言うとも汝ら

に従うべし。』(ルカ17・5～6)

と。即ち、神の約束されている「一デナリ」を本当にその角度から受けとるならば、「永遠の生命」がこの一デナリの中にもつている。もう二デナリ、三デナリと計算する世界ではない。大事なことは、

「一日における一デナリ」

という、

「一粒の芥子種」

という、この「一」という数において、私たちの魂の気合というものを深くすえなくてはならない。

このようにして、天国の一見不公平にみえるところの例え話の奥に、実は1も2も3も10も同じであるところの実態をみるができる。大事なことは、自分がその前で本当に無となつて、その1を100として受けることである。即ち、1にこもる100、1にこもる無限というこの価値、この力、これを受けとる。この角度から受けとるならば、私たちは一杯のお茶をいただいても、そこに非常な生命の味をいただく。

そのようなことで、私たちはこの人生において、いろいろ不公平にみえたり、つぶやき



たくなつてみたりすることがあるときに、

「ああ、これはこの世の法則で考えていた。私は実は天国人であった。根源においては天国人であった」

と。この天国の法則の世界に自分の魂を投げ込んで、そして、その与えられた「一」において無限の原始力として、生命力としてつかむかどうか。そうすれば、一日中働いて一デナリを本当につかまえた人はやはり最も素晴らしい人になる。もしそうでないならば、

「先なる者は後に、後なる者は先に」

ということになる。もし、後から一時間働いて、朝から働いた者と同じように、一デナリをもらって、

「こいつはもうけた」

と思つたならば、この後なる者が本当の後になつてしまう。先に来ようが、後に来ようが、そんな相対的な計算をして、「損をしたの、得をしたの」と思うならば、それはどちらも落第です。天国の葡萄園で働いたことにならない。問題は量に問わず質にある。

「後から来てたつた一時間しか働かないのに、前の人と同じ一デナリをいただいてしまった。私はもつと働かなければならない」

と思うならば、後から来た人は本当の受け方をしたことになるでしょう。問題はいつも私たちは天国的法則に従う。正直、魂が損得をぬけた無私の世界に入ると、力と喜びが来る。福音の世界でキリストが何故このような非常識なことを言われるかというところ、これは絶対法則を語っているからです。

● 0 = 100 = 8

心をおちつけて、祈りながら読んでいるうちに、本当のキリストの心がだんだんつかめてくる。私たちは自分をごまかすことはない。相対的な人間ですから、いろんな感情の湧いてくるのもある意味においてかまわない。けれども、必ずそれを乗り越えて、必ずそれに打ち勝つて行くことができなかつたならば、聖書を読んでいてもつまらない。また、「信仰している」だなんて言つたつて一向それは空念仏です。

たとえば、ルカ伝15章でも、99匹の助けを必要としない羊はそつちのけにして、たつた一匹の迷える羊を捜し求めて行く。

「これを得たならば天に大いなる喜びがある」

と言っている。キリストの心というものは、みんなそういつた心の働きをしている。

私たちのこの一人の人の存在がそのように絶対的な顧みをされている。我々の絶対的な数理というものが——天的な数理といいますが、数式といいますが——それはもう、

「0 = 100 = ∞ (無限大)」

というわけです。一の魂なら全一、分別のない一、そしてこの分別なき一というものが全



く自己に執しないところの一である。それがまた無限大である〔1＝100、1＝0、0＝∞〕。そういったような意味あい、キリストが今のマタイ伝20章で話をされたと思われます。

●福音の中に人を導き入れる

皆さんがこうやって、天国人になって大事な福音の世界に足を踏み入れた。皆さんの信仰はいい加減なものではないと私は信じます。それで、

「神に捕えられ、キリストという生命の御馳走を食べ飲まなければ、自分はどこへ行つて何を求めん。天にも地にも私が慕うべきものはただキリストのみ」

という人になってください。救われたクリスチャンは必ず生涯を通して、

「自分は本当に救われて、キリストの他に行くところがない」

というような魂に、一人の魂も導き入れなかったとしたならば、私はその人は天国に入れないと思う。自分が救われていなければ、人を救いに導くことはできない。パウロは、

「同胞が救われるためには、たとえ私はキリストに捨てられてもやむをえない」

と言いました。それはパウロの中にキリストの生命が溢れていたからです。

太陽が光らないでいますか。泉が溢れないでいますか。私たちクリスチャンはキリストに付き、天の父が喜んでくださるような、救われた一人ひとりでありたい。ですから、

「この福音の中に他の人を導き入れなければ死ぬわけにはいかない。もし一人も導

かないで死ぬならば、それはいぬじに犬死である」

と、キリスト者がはつきりと自覚すべきであろうと思う。何故キリスト教界が、「宣教百年」というけれども力がないかという、それはやはり、本当に救われているということの喜びと生命を、預言者たちや使徒たちがいただいた質において持つことが欠けている証拠ではないかと思う。

●存在そのものをもって証する

どんなに器が小さく、欠けた存在であつても、それはダイヤモンド金剛石である。このキリストの福音を受けとった者は金剛石です。そうしたならば、それは非常に光を発せざるを得ない。燃えざるを得ない、泉せざるを得ない。

S療養所のある若い友人がとうとう死亡しました。しかし、その病床に接していた人が、「これは本当のクリスチャンである、本当の信仰である」

と言つて、それを見て救われた。彼はなんにもいわゆる伝道はしなくても、存在そのものをもつて証あかしをした。その人は生きていた生涯で人ひとりを救うことができなかつたかも知れない。しかし、本当の神の力、キリストの力をいただいて恵みの中に生きていたならば、その実存と祈りは決してむなしくはない。その人が亡くなったあとで、地上の生涯を終つた後で誰かが必ず救われる。決して神さまは人ひとりの本当の存在をむなしくならぬ。



●救われていない兄弟に対する悲願
 私たちが救われたということは、

「この喜びを人に分けたなければ、わが生命は生命にあらず」という、この自覚を大いに持たねばならない。救われたことに安住している魂ではその生命そのものがだんだんだメになってくる。生命は生命を与えることによって、光は光を放つことによって、水は泉することによって、いよいよ生命となり、光となり、泉となる。クリスマスチャンはその生命を、愛を分かつことによつて本当のクリスマスチャンになる。そして、神に連なつているところの神の人、天国人であることの自覚をもつと深く強くしななければならぬ。

東療（東京療養所）の方々は、まだ幾百人の人がいるか知りませんが、その人々にあなた方の実存をもつて、悩める人たち、苦しめる友に、接していくならば、たとえこの療養所にいるときに実現しなくても、必ずその望みは、その祈りは聞かれて行く。もし救われていない兄弟に対する悲願を持たないとするならば、その信仰それ自体が本ものでないと言われても仕方がないわけです。

●私たちの魂が神・キリストに直結する

私たちが、この原始福音に、聖書の使徒たちの福音に気がついた者たちであるならば、もつとお互いさまに実践して行きたいと思う。そのようなかけがえのない「一」を次から次へと展開してくるはずのものです。そこに天国法則が働く。相対的な世界ではいかに不公平、不合理にみえましても、もうそんなことはよろしい。その奥でもつて神の法則に則^{のつと}っている者はどんなに素晴らしい展開をするか。それはちょうどキリストが、

「私よりも、父母、子、妻、兄弟を愛する者はわが弟子に相^{ふさわ}応しからず」

と。一切の自分の相対的な環境を神・キリスト、福音以上に愛するならば、それは天国人ではない。即ち、私たちの魂は、神・キリストに直結するところの一人ひとりです。そして、一切を顧みないというのですから、これはまた一つの世界です。そうしたならば、

「今まで捨てたと思つていたものを逆に百倍も受けて展開をさせる。捨てたと思つたら、それは質的にも百倍の愛をもつて荷い上げていくぞ」

と。これがやはりキリストの天の法則の働きです。正直そういつたような角度の魂にならなければ力も出てこない。必ず行き詰まりをきたさないとこの、展開して止まないところの、まあなんとも始末のわるいやつだと思われような魂になる。

●無限の天文学的な展開をする人となる

ブラウニングの詩の中に、

「百万を望んで一つもかなわなくとも、



その人は決して人生を不成功にしたのではない。
問題は自分というものを愛として投げかけて行くような、
オール・オア・ナッシング (all or nothing) というような
魂が本当に展開するのである」

という意味のことを言ったところが、何かにあったと思います。

「私がなし得なかった一切、人々が私において悔ったところの一切、
それが私が神に対して価値のあったゆえんである。

自分が成ろうと思つてなり得なかった一切、

また、人々が私を認めてくれずにないがしろにして捨てた一切、

それが私が神に対して価値があったゆえんである。

自分が老年になって人生をここまで来たけれども、

自分ももつともつとこうでありたかと思つたが、ちつともなり得なかった。

人々が本当の自分の価値を認めてくれなかったけれども、

その一切が実は神さまの前に自分が価値のあったところのものである。」

という。それは相対的なものを、結果を考えているのではない。

「成りたかった、やりたかったというような望みを持つてくることは、

それがどんなに欠けた弧であっても、必ずそれは天上において円になる」

と、別なところに書いてある。本ものであるならば、それがどんなに小さな者であっても、必ずそれは天国において完成する。ところが、どんなによさそうで、ジャーナリズム式に、人に大いにもてはやされて名声を得ていても、それが天的な角度で本ものでないならば、時がさばいて亡びる。天国を築く者は、ただ本ものだけです。

どうか、皆さん、私たちは人にどう思われようが、またどのようにそれが達成されませんでも、常に水を割らずに本ものに向かつて進むことです。そうすれば、それがどんなに失敗のようにもみえても、どんなにそれが小さくあっても、必ずそれが天国の築かれる一つの大切な要素をなしているという大確信を持つて進んでいただきたい。

この相対的な破れの人生において、神さまからくる絶対的な角度の確信を個なる魂に持たなかったならば、人生はつまらないですよ。すべてを計算をもつてしたらつまらない。キリストは、

「計算をやめよ」

と言われる。この世の国においてはこの世の計算に、あるときは従わなければならないかも知れないが、そんなものに支配されることなく、問題は計算を越えた世界で、無限の天文学的な展開をする世界の人となることが必要なのです。その天文学的数字とは、即ち自己をゼロとしているような魂の在り方です。それが本当に

「二日一デナリ」



の在り方をして行く人です。
この療養所の生活において本ものをつかんで行ってください。必ず力が来る。祈りも必ずなし遂げられる。

●キリストという一デナリ

ブラウニングが辞世の詩をもつと勇敢に歌ったのがある。

「いまだかつて雲がかかっても、晴れることを疑ったことがない。

倒れるのは、必ず起き上がらんため、眠るのは覚めんがためである。

決して背中を見せたことがない。ただ、胸を張って前進するだけ。

悪が善に勝つとはつゆ夢見たことがない。

こういう魂がいま、地上を去ろうとしているのだから、

君たちはいま大歓喜をもって私を送ってくれ。もつと先に闘って行け。

かしの彼岸におけるごとく、いよいよ闘い前進せよ」

と叫んでくれている。そのような迫力はどこから出てくるか。日本人が最後の一押しがないと言われますが、それはやはり宗教的な最後の力を持たないからです。

学問があるとかないとか、健康であるとかないとか、そんなことは問題ではない。あなた方はどうか福音において、

「自分は無益なる下僕なり」

と言つて、神の前に挺身すればするほど、いよいよ有益なる下僕として使つてくださる。魂の奥に本当のキリストの光を、生命を持つてください。ただ聖書一巻を凝視して、しっかり読んで祈つて行ってください。必ず驚くべきことが展開します。どのような過去があろうとも、肉体上の欠陥があろうとも、そんなことは問題でない。私はただ神癒とかいうものを語っているのではない。もつとキリストの生命の世界は、相対の判断を超えたところの、本当の意味における生命の実存の世界です。それが故に、キリストが例え話の中で約束された「一デナリ」は、

「キリストという一デナリ」

なのです。これは無限に展開するところの一デナリです。今日一日、キリストを食らえば、明日は必ず力が出てくる。キリストは余計にはくださらない。今日一日の力をくださって、また、それを本当に十分に活用していくとき、キリストはまた、翌日どんどん力をくださる。決して心配はいらない。そんなわけで、どうか喜び勇んで進んでください。

